

# ルールを決めるのは誰か ハヴェル「間違い Chyba」(1983年) 試論

野 田 伊津子\*

Who on earth makes these rules?  
An Approach to Mistake *Chyba* (1983) written by Václav Havel

## 1. はじめに

東欧における旧チェコスロヴァキア社会主義共和国（事情上は1948年に始まるが、正式に「社会主義」を国名に入れたのは1960年より89年まで）時代とは、歴史的に異なる発展過程を経てきたチェコ民族とスロヴァキア民族との、1918年の建国に始まる絶えず摩擦をともなった実験的統合の新段階であったといえる。言語においては、チェコ語とスロヴァキア語には日本語における東京弁と大阪弁ほどの差異しか見出し得ないとする言語学者の意見<sup>1</sup>が現在も主流であろうが、統合にいたる以前の歴史の違いは、言語における差異よりも大きい溝を両民族に残していたというのが実情だったのではないだろうか。

\* 金城学院大学キリスト教文化研究所客員研究員

<sup>1</sup> 「チェコ語は特に東隣のスロヴァキア語とは非常によく似ており、第2次世界大戦の前後までは、スロヴァキア語をチェコ語の方言と見なす人が少なくなかった程である。」小林正成・桑原文子『現代チェコ語日本語辞典』、大学書林、2001年、序文。但し、小林氏自身が認める通り、この辞典は日本におけるチェコ日辞典の草分けであるため、今後の発展が望まれている。

戯曲「間違い Chyba」(1983年)は、この実験的な統合国家における新しい段階の時代(1948-89)に劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル(1936-2011)によって執筆された。ハヴェルにとっては体制による言論統制に反対して三度目の投獄、初めての長期服役の直後に執筆された作品であり、完成後、西側外交官を含めた仲間の連携によって、秘密警察による没収を受ける間もなく速やかに国外に持ち出され(Rocamora 240)、ストックホルムで初演が果たされた(Rocamora 228)。

本稿の目的は、両民族の歴史的な差異が戯曲にいかん反映されているかを確認し、先行研究をふまえた上で、作品に提示される普遍的な問いへの手がかりを模索することである。ハヴェルによる原稿の底本としては、ハヴェル自身が大統領在位中1999年に編纂が始まった『選集 Spisy』を信用に足るものとして用いる。

## 2. 先行研究

先行研究調査において、和文はCiNii Articlesに対し著者名と戯曲名を鍵言葉として検索を行い、一篇も存在しないことを確認した。欧文は論文データベース(Web of Science, Ebsco host, Jstor, ProQuest)に対し、著者名Václav HavelにChyba(チェコ語原題)、Mistake(英訳)、Der Fehler(独訳)、Tant pis(仏訳)、Fout(蘭訳)をそれぞれ加えた検索を行った。これらは、いずれも各国語で出版された「間違い Chyba」の翻訳名である。場合によっては検索対象を絞るために、各国語で劇を意味する言葉を加えた。その結果、一、まず原文のみから得られた両民族の歴史的な差異の戯曲における現れを確認した後、二、英訳においては翻訳者の意図が原作者の意図を越えて混入されており、そこから論じられた英語論文の一部に誤謬が生じてしまっていることを原文に沿って修正し、三、自由のために戦って獄中にあるハヴェルのために書かれたベケットによる戯曲の背景とハヴェルの方

向性との類似する理由を確かめた上で、四、同時代に生きた米国作家テネシー・ウィリアムズ(1911-83)にハヴェル「間違い Chyba」と同種の戯曲を見出し、両者を比較することによって、ハヴェルが「間違い Chyba」によって提示した主題の理解を深めることができた。

### 3. 間違いを再考する ― 誰の間違いなのか、なぜ間違いなのか

題名に「間違い」と銘打ってはあるが、このわずか五分から十分の寸劇(Rocamorra 225, 322)において、表面上は誰の間違いでもないことに観客は気づかされる。そして通常の市民社会においては、それ自体が犯罪とみなされる暴力による解決が選ばれる。間違いというならば、この解決法が間違いであるのだが、刑務所内においては自己の生き残りは各々が自分で責任を負わなくてはならない(Rocamora 225)。ハヴェル自身の語り尽くせぬ実体験が反映されている<sup>2</sup>。そして、この入獄の前に、1977年、ハヴェルは憲章77の代表者の一人となって、その失敗とともに収監されたが、その際に釈放を求める手紙を当局に書いたところ、あたかもハヴェルが憲章77の代表を降りるかのような印象を与える歪曲する文を加えられ、長くハヴェルを後悔させることになった。それによって刑期を長くしたのではないかと後日述べている(Havel, *Spisy* 51)。題名には自分の経験をふりかえり、刑務所に収監されること自体が間違いなのだという意味もこめられているようだ(Rocamora 226-27)。

#### 3.1. なぜ「マジャール(ハンガリー)野郎」が問題なのか

監獄における新入り XIBOJ が他の囚人たちが話しかけても何も話さず

<sup>2</sup> “It’s an experience which I myself have had twenty times,” Havel says in videotaped interview about the play. Since Havel was continuously moved from one prison to another, he fell victim to this ritual frequently. (Rocamora 226)

曖昧な笑みを浮かべて当惑していたのは、外国人（作中ではハンガリー人）だからではないかという推測が第三囚人よりなされ、KINGも納得はするが責任を問うことを止めず、むしろ私刑の確定判決を出す。言語による障壁があるゆえに、チェコ人を理解しないハンガリー人、ハンガリー人を理解しないチェコ人というイメージが一般的なものであろうことを想像させる（Rocamora 225）。では、両者にはどのような違いがあるのか。中世にスロヴァキア民族はマジャール人の支配を受け、同時代にチェコ民族はプシェミスル王家による発展を遂げた。そして現在スロヴァキア共和国がある地域は二十世紀初頭までハンガリー王国（マジャール国）の一部としてハンガリー人の支配を受けた。この歴史的な違いがチェコスロヴァキア建国（1918年）後も国の統一に陰を落とすことになる。第二次世界大戦下においてナチスの支援を受けて独立国となった経験を持つスロヴァキアは、事あるごとに独立国であることを求め続けていた。共産党一党独裁時代には表面化しなかったこの動きが、ビロード革命（1989年）後に再燃し、スロヴァキアはロシアの支援を受けたメチアル主導の民族主義により再び独立の道をたどることになる。歴史の残酷さとも言えるのだが、スロヴァキアが独立のために支援を求めた体制は二回とも全体主義的な色彩の濃い政治体制であった。

ビロード革命後、1991年にハヴェルがアメリカを尋ねたとき、俳優ポール・ニューマンは「自分はハンガリー人だと思っていたけれど、チェコ人であることが分かった」とハヴェルに告げたが、それに対してチェコ出身でアメリカにおける窓口を務めていたオルブライトは、「私たちが彼を引き受けるわ。彼はスロヴァキア人よ」とハヴェルに話したエピソードが残されている（Bigler 457）。「間違い Chyba」執筆時点で、スロヴァキア人ならばチェコ人とは同国人であり、言語にも方言程度の差異しかないが、ハンガリー人はチェコ人にとっては外国人となり、言語も自然に覚えるほど近くはない。そしてスロヴァキア人にとってハンガリー人とは、かつて

自分たちを支配した歴史を持つ民族であるという関係性がある。外観では見分けがつかない異国人が刑務所にいる場合に起こりうる勘違いからくる悲劇であるが、その勘違いは決してハンガリー野郎のせいではない。むしろ勘違いは、刑務所内の抑圧を再生産し、暴力でルールを守らせようとする KING たちの方なのである (Carey, *Living* 200-12)。なかなか返事をせず曖昧に微笑むだけの XIBOJ に対して、態度が男らしくないという理由からだだろうけれど、散々ホモだとか女<sup>めろ</sup>郎だとか下品な罵声を浴びせていた彼らが、自分たちが勝手に誤解していたことに気づくあたりは少々愉快なくだりで、俳優たちの力量によって喜劇にしたてることができる。チェコ語では日本人男性は *Japonec*、日本人女性は *Japonka* というように同国人でも男女で違う単語が割り当てられている。ハンガリー男性なら *Maďar*、ハンガリー女性なら *Maďarka* である。ハヴェルは下品な罵り言葉に対して、意識して男性であることを示す単語を使って第三四人に「こいつはハンガリー野郎か何かじゃないかと— *Vždyť to je nějaký Maďar nebo co*—」と言わせたとしか思えないのである。悲惨な状況を客観視する作家の能力が、わずかながらではあるが、この戯曲の光となっている。

#### 4. 英訳を基にして書かれた論文における異なる結論の可能性

英訳は早い時期、1983年に George Theiner によってなされており、以降、英語によるハヴェル戯曲集に収録された「間違い Chyba」には彼の英訳が掲載されている。この英訳は、囚人の訛を英語学の専門家でない読者にも分かるように挿入してある点が素晴らしく、原作の雰囲気伝えることに成功している。しかし、数カ所、原作者が書いていない表現を加えてあり、一方で、積極的に訳出してほしい囚人間の力関係に関する部分や、自分たちが収容されている刑務所を戯画化していると思われる部分を訳出していないところが残念である。これらに関して、他の部分は意識という

ことで済まされるのかもしれないが、題名に関わる KING の最後のセリフ「彼の間違いだ— Jeho chyba -」を「それなら、あいつの血まみれ葬式だ Well, that's his bloody funeral…」とやってしまったのは、意図は伝わるにしても行き過ぎの感を否めない。主要な研究者の一人である Rocamora は研究書でこの部分を紹介するにあたり、Tomáš Rychetský による「それなら、あいつの間違いだ Well, that's his mistake…」という英訳を用いている (Rocamora 455)。だが、Rocamora の研究書が出版される以前に書かれた英語論文には、George Theiner による英訳を基に論じたものもあり、この最後を「戯曲は KING による XIBOY に対する死刑判決で終わる。The Play ends with King's "death sentence" for XIBOY.」として、そこから論を展開させている部分を持つものもある (Carey, *Living* 200-12)。実際は死刑判決ではなく私刑判決であり、原文には、どの程度の暴力か、具体的な暴力行動も途中までト書きに書いてある。

翻訳者は自己の判断を無にして原作者に添うことができることばかりではないし、それを完全に実行することは他者である限り不可能である。商業的な成功をも視野に入れて考える場合は、属する文化によって大胆な翻案も採用されうる。しかし、題名にも採用されるような部分は原作者の意図を示す重要な箇所であり、本来なら翻訳による改変は差し控えたいところである。研究対象として扱う側の対策としては、翻訳だけに頼らず、原文にもあたるとするのが現状であろう。

### 5.1. カミュ Camus がフランスで再評価される時：なぜ革命ではなく抵抗か

アルベール・カミュ Albert Camus が革命ではなく反抗こそが社会を具体的な形で変革しようと説いて『反抗的人間 L'homme revolte』を著したのは1951年であるが、歴史の後日を知る身から見れば、早すぎた才能としか言えない。翌年、この本をめぐる、サルトルと論争になり、共産党・マルクス主義の影響の強かったフランス思想界におけるカミュの孤立をもたら

してしまった。カミュは政治にあっては目的の正当性は手段の正しさによって証明されねばならないとして、暴力を容認するレーニンの社会主義革命ではなく、決して暴力を正当化せず、人間の限界を否定的に明らかにする反抗こそが、社会を具体的な形で変革できると説いた。アルジェリア戦争など、テロと弾圧の繰り返しの中にあって、市民の平和を呼びかけるカミュは政治的無力さを際立たせてしまい、1957年にノーベル文学賞を受賞したときも、国内の反応は冷やかなものであったそうである。しかし、その後、70年代中頃から、ソルジェニーツインによるソヴィエト収容所体制の告発、中国「文化大革命」の挫折や内実、第三世界における様々な社会主義の実験の行き詰まりが国外で起こり、フランス国内では1968年5月の一時的解放を経た後、結局、取り返しのつかない袋小路に追い込まれた左翼主義の崩壊を目にした知識人たちが革命神話の幻想から覚醒するとともに、カミュが再評価されるようになった(Fodor 527)。

亡命を勧められても自国内に留まり、言論の自由のために抵抗を続けて投獄されたハヴェルのためにベケットが戯曲「カタストロフィ Catastrophe」を書いてアヴィニオンで上演した1982年とは、フランスでカミュが再評価された時代でもあったのである。

## 5.2. サミュエル・ベケット Samuel Beckett 「カタストロフィ Catastrophe」(1982) への呼応<sup>3</sup>

アヴィニオン演劇祭(1982年)において、芸術家連帯という組織が企画した『ヴァーツラフ・ハヴェルのための夜』のためにベケットが書き下ろしたのが「カタストロフィ Catastrophe」である(ベケット 334-35)。長期投獄されているハヴェルを擁護するためであるが、政治の権力性を批判す

<sup>3</sup> 1983年11月、ストックホルム Stadsteater がハヴェルと憲章77のために「連帯の夕べ」を開いたとき(Havel, *Spisy* 2 1036)、ハヴェルがサミュエル・ベケットに献げて書いたのが本作「間違い Chyba」とロカモラは記述しているが(Rocamora 224)、1999年に選集に収録された本作には、他の戯曲に献辞が付いているものが幾つかあるにも関わらず、献辞にあたるものは付いていない。

るとともに、演劇を含むあらゆる「制度」につきものの権力性をも劇中劇という形式で批判していると言われる（ベケット 334）。中央に立たされた人形のような人物（おそらくハヴェル）に対して、演出家が助手を通して次々に指示を出す。演出家が劇中の観客席にまわり、「すごい大詰めだ。成功間違いなし。There's our catastrophe. In the bag. (Beckett 35)」<sup>4</sup>と言って、実際に拍手にわいたところで、中央に立たされた主人公が指示に逆らって顔を上げて観客たちを睨む。そこで拍手がひるんだように鈍り、消える。演出家が大詰め（演劇用語カタストロフィのこと）と思い込んだ矢先に、主人公の反抗によってそれが無化され、その後のカタストロフィが劇中および現実の観客を脅かすというプレヒト異化効果の活用である。これに回答して書かれた「間違いChyba」は異化効果ではベケットによる「カタストロフィ Catastrophe」に一步譲るが、ベケットが扱わなかった外国人あるいは移民といった存在に照明をあてることで、かえってハヴェルのおかれた状況の厳しさが伝わってくる。祖国であり、自国である場所で、異国人としか思えないような圧力を加えられる経験をしたハヴェルにとって、ベケットの風刺すら夢のような優しさに満ちた世界だったのではあるまいか（Welz 289-90）。

## 6. テネシー・ウィリアムズ Tennessee Williams (1911-1983) との関係

自国で一般市民でありながら、あたかも刑務所にいるような待遇を味わうというのは、旧東側にいた人権活動家だけの経験ではない。同時代の米国で活躍したテネシー・ウィリアムズは、早い時期に人種差別を正面から

<sup>4</sup> ベケットがアヴィニヨン演劇祭（1982年）に書き下ろした本作「カタストロフィ Catastrophe」は、まず仏語で執筆され、発表された。その後、英語を母語とするベケット自身の手で英訳された。本稿では、ベケットの母語が英語であることを考慮して英訳を採用した。



テーマにした戯曲を書いた。しかし、その上演は彼の死後、新世紀に入ってからであった。ここではウィリアムズによる類似の戯曲を通してハヴェルが抱えたテーマを検討し掘り下げる。

### 6.1. ウィリアムズ「脱走 Escape」におけるテーマの分岐、内在化および外在化

ウィリアムズには二つの「脱走 Escape」劇がある。一つは支配的な母親からの十代の若者の逃亡をテーマにした「脱走 Escape」で、2004年にワシントンのシェークスピア劇場で初演され、後に「湖畔の夏 Summer at the Lake」と改題されて書籍に収録された (Williams 55)。そして、もう一つの「脱走 Escape」は黒人の刑務所からの脱走がテーマで、テネシー・ウィリアムズ/ニュー・オーリンズ文学祭で2005年に初演された (Williams 37)。この二つの脱走は、形は違えども束縛からの逃亡という点で一致し、片や母親の目に見えない支配からの自由を求めるという内在化が行なわれ、片や実際の刑務所からの自由を求めるという外在化がなされている。どちらも脱走は成功したのだろうか。それは観客によって判断が分かれるだろうけれど、成功していないと見るのが現実的である。ルールを敷きたがる母親からの逃亡は湖に飛び込み、そのまま戻らないことであり、刑務所からの脱走は警官たちの発砲による死を予感させて終わる。

### 6.2. ハヴェル「間違い Chyba」が処理しきれなかった差別

「間違い Chyba」の主題をよく理解するために、刑務所を舞台としている方の「脱走 Escape」と比較してみよう。人物に対する命名においては、「間違い Chyba」では主要な二人を除いて囚人は序数で示されるのみである。しかしウィリアムズは逃亡した囚人を BILLY、カードゲームをしながら逃亡の様子を話し合う残された三人の囚人たちを BILLY に対する態度によって、好意的な BIG、中立の STEVE、敵意を隠さない TEXAS と名付け、彼らの会話を通して状況を描写していく。大きな違いは、ハヴェルは目に

見える対象を扱う一方、ウィリアムズは脱走したBILLYについて話し合う三人しか観客の前には示さない (Williams 39-54)。そのため、観客は彼らの会話と外界の音から何が起きているのか推測するのである。どちらも差別を扱っているようだが、ハヴェルにおいては実は言語が問題となっている。もしXIBOJにチェコ語が理解できたなら、実際は外国人であっても、問題にはならないだろう。ウィリアムズの場合は黒人であることで容赦なく降りかかる差別である。流暢であれ、スラングだらけであれ、どれだけ相手に合わせた内容と発音で言語を扱えたとしても、逃れられない差別を扱っている。そのような逆境はハヴェルの人生で想定されていないものであり、このゆえに彼の戯曲は決定的な悲惨さから遠い。ハヴェルとウィリアムズ、両者は戦う対象が違うのである。

### 6.3. 登場しない登場人物が無言で伝える背景

ウィリアムズにおける、テーマが外在化された文字通りの「脱走Escape」においては、舞台上に登場しない白人が追っ手として象徴される高圧的で暴力的な激しい人種差別を感じさせるように筋が組まれている (落合 37)。これには1930年代という執筆当時の社会状況が反映されているだけでなく、1931年に起こり、60年代を通し現在まで影響を与えているスコッツボロ事件 Scottsboro case へのウィリアムズの関心が強い影響を与えていることは、ほぼ疑いがない (落合 38-39)。この事件は人種差別があからさまに表面化した事件であり、被疑者とされたアフリカ系アメリカ人の九人の内、逃亡した一人を除く八人は長い紆余曲折の末、後に全員釈放された。1948年に脱獄したパターンソンのみ一時的に自由の身になったが、数年後に故殺罪により収監され獄死した。

一方、「間違いChyba」では収監された人に檻の中での規則を伝える存在「彼ら」に第二囚人が言及する。しかし、それは刑務所で生活するためのルールである。差別されているのは頭の中の自由主義思想であり、外見

で分かる人種ではない。ハヴェルにとっての反体制活動家の定義は政治と関わりが薄い<sup>5</sup>。

## 7. 神の超越性に対する視座

もしキリスト者が、なぜキリストは磔にされたのかということをおぼろげに忘れてしまうなら、知らずに再びキリストを磔にしてしまう危険性があることを否定するわけにはいかない。ハヴェルは同じチェコの劇作家・小説家・ジャーナリストで「ロボット」という新語を造ったカレル・チャペック Karel Čapek (1890-1938) との作品の類似を言及されるのを嫌がった。人間を虫のように考えるチャペックの悲観主義が肌に合わないのである (Czerwinski 212)。ハヴェルは人間の可能性に望みを捨てていない。それが彼の作品の魅力にもなっているが、しかし、それは新たな問題をもたらす可能性を否定できない (Carey, *Face* 43-57)。チェコとスロヴァキアはカリスマ性のあるリーダーに依存することで彼らの政治的な継続性を危険にさらしてきた。チェコ人は殉教と政治的な失敗という結果になり、スロヴァキアにおいてはファシズムへ向かう傾向である (Quinn 72)。神である主の前に人間は人間にしか過ぎないこと、人間の弱さを例外なしに認めることが、弱さからくる失敗を予防する方向へと導いてくれ、かえって人間を人間らしく生き生きと活かす道なのではないかと難しい時代に対処する文学作品を通して考えさせられる。

---

<sup>5</sup> According to Havel, dissident was a label applied to individuals who refused politics and sought to “live in truth.” (Straughn 1598-0\_7)

## 8. 結びにかえて：不安定な現実の中にある安定<sup>6</sup>

ハヴェルは実質三度目の服役期間中である1983年に健康を害し、妻を筆頭に国外に亡命していた友人を含め仲間たちの必死の努力のお蔭で（Keane 296-99）刑期を中断され釈放された。「間違いChyba」は、この時に執筆された。（その後、立て続けに1984年に「ラルゴ・デゾラート Largo desolato」, 1985年に「誘惑 Pokoušení」が生み出されている）。本稿で確認したように「間違いChyba」ではハヴェル自身の隠された眩き・不満・不安がチェコ語で、ある程度、明確に示されている。本来は自国民でありながら、否応なしに闘争に身を置く彼には自分が外国人であるかのように感じることが多かったのではないか。彼がしばしば自己の観察する視線を「外から」「下から」と表現することとも一致する（Havel, *Spisy4* 702-03）。自分自身も檻の中にいながら、檻の存在に慣れきり無自覚になるだけでなく、その檻の中で管理人を気取ろうとする KING は、その檻を管理する存在が KING 以下三人の囚人たちを抑圧するのと同じか、或はより強く再生産された方法で、自分たちと同じ対象に関心を持たない存在 XIBOJ を容認できず抑圧しようとする（Carey, *Living* 200-12）。しかも、言葉が通じないが故に意思疎通がうまくいっているように表面上は見えた現実が崩壊したとき、XIBOJの方が危険に曝されるのである。ハヴェルにとって同国民であるはずの人々が、つまり自分と余り変わらない利害を共有しているはずの同じ檻の中の人々が、あるとき突然、傀儡政府の煽動によって自分を敵視してくるこの恐怖は如何ばかりであったろうか（Havel, *Spisy4* 822）。XIBOJを外国人であるかもしれないという設定にしたことで、か

<sup>6</sup> 1983年に出獄を許され、つかの間の夢のような自由な時間を過ごした後、現実世界へ戻ったハヴェルは「(それから)不安定な土壌の上を、ずっと今日までゆっくりと移動している Vykročil jsem do něho počátkem března, tedy o něho déle než před třemi lety, a po jeho nejisté půdě se sunu dodnes.」と1986年に対談で語っている（Havel, *Spisy4* 870）。

ろうじてハヴェルは直裁な表現を避けることができたと思われるが、それでも戯曲を支配する生々しい恐怖感はぬぐい去ることができない<sup>7</sup>。囚人たちはKING以下、皆、訛の強いチェコ語を話す。その中でXIBOJは一言も話さないのである。ハヴェルの自伝的戯曲の一つである「謁見 Audience」(1975年)では、この訛が鍵となって笑いを誘ったが、その中ではハヴェルの分身 Vaněk は仕えているビール工場の工場長から、言葉に訛が無く態度が礼儀正しく恭しいことを訛だらけの言葉で責められるのである。その遣り取りを逆手にとって最後には Vaněk が打って変わって工場長をまねた訛の強い言葉で返答して笑いをとるという筋書きで、映画『My Fair Lady』のような言葉による遊びを楽しめる作品だったが、長い刑期を経験し、獄中で健康まで崩した後に書かれた「間違い Chyba」(1983年)には一方的に言葉を浴びせられて当惑し沈黙する人間が描かれる。

そしてチェコ語原文に無く、英訳で翻訳者 George Theiner によって KING に付された a trustie という説明は、この劇のもう一つの解釈の可能性を浮かび上がらせる。trustie という本稿執筆時に未だ主要な英和・英英辞書に収録されていない<sup>8</sup> 古いスラングは、働かなくても保護者あるいは信託財産のお蔭で食べていける中間層、揶揄する場合も含めて懸命に働

<sup>7</sup> 深刻なテーマを扱っているとはいえ、ハヴェルにとって作劇は楽しい芸術活動の一環、本来の領域であったこと自体は疑いが無い。フランティシェク・ヤノウフ František Janouch との書簡においてハヴェルは、友人との話し合いによって「最初から外国人がそこにいた」という設定に変更し、そのお蔭で「間違い Chyba」が新しい次元に到達したという仲間内の意見を喜びとともに記しているが、それが様々な見方をされることを見越しつつも、「しかし、自分は、それをただ楽しみのために書いている Ale to píšu jen tak pro pobavení」(Havel and Janouch 86-87) と述べている。

<sup>8</sup> 少なくとも、リーダーズ英和辞典(第2版)、ジーニアス英和大辞典、ランダムハウス英和大辞典(第2版)、Oxford Dictionary of ENGLISH, THE NEW OXFORD AMERICAN DICTIONARY (SECOND EDITION)、Oxford Advanced Learner's Dictionary (8<sup>th</sup> edition)、Longman Dictionary of Contemporary English 5<sup>th</sup> Edition、オーレックス英和辞典、200万語専門用語英和・和英大辞典、新編英和活用大辞典、英語類語辞典で見つからない。

かなくても食べていける人を指す<sup>9</sup>。衣食住に困らず、時間を持て余し、自国あるいは自分のおかれた現実には無関心でいる一方で、目先の勢力保存には執着し、自分と同じように振る舞わない存在を抑圧する。これは共産主義一党独裁体制においてのみ起こることだろうか、と翻訳者は付言を通して問いかけてくる。守られた環境の中で、自分が居る「檻」の存在自体には無関心で、その中で上手く立ち回ることにのみ専心する事象は、資本主義世界にも共通に見受けられるのではないかと、Chybaのテーマが普遍的でありうる可能性を読者に意識させるのである。また卑近な見方をすれば、刑務所の中では自由が無いかわりに、品質は世間より甚だしく劣っても衣食住が保証されているという事実の皮肉ともとれる。かつてラカン派マルクス主義者スラヴォイ・ジジェク Slavoj Žižek は、

Although the Communist regimes were mostly a dismal failure, generating terror and misery, at the same time they opened up a space for utopian expectations which, among other things, facilitated the failure of Communism itself. What anti-Communist dissidents such as Havel overlook, then, is that the very space from which they criticised and denounced terror and misery was opened and sustained by Communism's attempt to escape the logic of capitalism. (Žižek 3-6)

と述べて、そもそも共産主義によって切り開かれた場で真正な連帯を求めているのだから、従来通りの野蛮な形態の資本主義は、共産主義に対するハヴェルの闘争が掲げる高い目標を実現することはできない (Žižek 3-6)

<sup>9</sup> スラングや流行語を収めたネット辞書 <http://www.urbandictionary.com/>では、「Trustie A very middleclass person, usually who attends university who does not have to, and never will attend a hard days work in their life. Due to having ridiculous trust funds, or/and rich parents. Can also be applied to someone who has loaded parents so has no desire or need to work.」とある。(2014年12月17日アクセス)

と評したが、少し見方を変えただけで、このような解釈をも可能にする戯曲を読めば、確かに否定できないのかもしれない。ハヴェル自身は共産主義に惹かれたことは一度も無いと自伝で語っており (Havel, *Spisy* 4 704), その体制から受けた余りにも多くの不利益を考えれば当然のことと思われるが、置かれている環境(≒檻)は不快なことが多いにしても、その環境から受けている利益は空気のように慣れて当然のことと感じられ意識もされなくなり、不利益だけが目にとまりやすいという万人に共通の性質からはハヴェルも自由ではなかったということだろうか。幸い、ビロード革命で体制が変わったとき、彼は不慣れながらも政治家に転身し、その理想を追い求める姿勢から、政治家というよりは哲人として十年余りに渡って国の顔となった。無論、Václav Klausのような実務型政治家が、意見の対立がありながらも協力関係にあったお蔭であろうけれど<sup>10</sup>。

「間違い Chyba」においてハヴェルが最も自分と近いと感じて描いている登場人物は誰だろう。通り一遍だけで解釈するなら XIBOJ とするのが妥当であり、ハヴェル自身も認めるところだろう (Rocamora 226)。しかし、ハヴェルの側からだけ物事を見ることによって本稿で考察してきた「間違い Chyba」の本質を見失わないために、反体制作家時代のハヴェルはチェコスロヴァキアにおける最も重要な反体制活動家という地位を確立するためには行いにおいて KING のように行動したときが無いわけではなかったという敢えて少々残念な事実 (Keane 209-334)<sup>11</sup>を付して論を閉じたい。

<sup>10</sup> ハヴェルとクラウスの両者を比較した研究書がチェコで出ている。Mandler, Emanuel. *Oba moji prezidenti*. Praha: Nakladatelství Libri, 2004.

<sup>11</sup> 政治学者キーン Keane による本書は、確かに知る必要もない醜聞としか言えないような内容も多いため、書評で非常に辛口の評価を付けられていた (Excerpts 436)。ハヴェル本人だけでなく周囲に対しても容赦のない記述が目につくので、真偽を確かめる術のない内容に関しては、残念ながら、この書評の評価に従わざるを得ない。

## 9. 選集『Spisy 2 Hry』に収録された戯曲「間違い Chyba」翻訳

できる限り誤解を避けるため、日本語として多少不自然でも直訳に近い和訳を心がけた。囚人たちが話すチェコ語は文語ではなく口語で、しかも訛がある。また表現が倫理上、受け入れがたい可能性のある箇所があるが、修正は加えず、原文を直訳することのみに努めた。

Chyba 間違い  
JEDNOAKTOVÁ HRA 一幕劇

1983 1983年執筆

OSOBY 登場人物たち

XIBOJ<sup>12</sup> クシボイ

KING<sup>13</sup> キンク

PRVNÍ VĚZEŇ 第一囚人

DRUHÝ VĚZEŇ 第二囚人

TŘETÍ VĚZEŇ 第三囚人

Když se otevře opona, jsou na levé straně scény dveře, v nichž stojí namačkání První, Druhý a Třetí vězeň a v jejich čele King. Všichni jsou ostříhání dohola, více či méně potetováni - nejvíc King, mají na sobě vězeňský stejnokroj a hledí upřeně na Xiboje. Na pravé straně scény jsou na sobě tři kovové vězeňské postele, na nejvyšší z nich sedí Xiboj, rovněž dohola ostříhán a ve vězeňském stejnokroji, ale

<sup>12</sup> チェコ語で boj は「戦い、闘争」を指す。また XI はギリシャ数字で 11 とも解せる。一方で KING という名前を採用したハヴェルが XIBOY とせず、XIBOJ にしたことを考慮して付記する。

<sup>13</sup> 英語の発音をそのまま採用するならキングとなるのだが、ハヴェルが国外で上演されることを想定して付けた名前ということをふまえつつも、念のため、チェコ語における発音を採用した。



bez tetování. Xiboj je nováček a hledí poněkud vyplašeně na skupinu natěšnanou ve dveřích. Delší napjatá pauza.

幕が上がると、舞台セットの左側に扉があり、その中に、第一、第二、第三囚人と、彼らの前にはキンクが詰め込まれている。全員がきれいに毛を刈り込まれている。彼らは多かれ少なかれ入れ墨をしており、もっとも入れ墨の多いのがキンクだが、彼らは囚人服を着ており、瞬きもせずクシボイを見ている。舞台セットの右側には三台の金属製刑務所用ベッドが備え付けられており、それら三台のうち最も高い所にクシボイは座っている。彼もまたきれいに毛を刈り込まれており、刑務所の囚人服を着ており、しかし入れ墨はしていない。クシボイは新入りで、多少おびえてドアのところに密集している集団を見ている。もっと長い緊張した間。

KING (ke Xibojovi) Prej sis zapálil po budičku - (Krátká pauza)

キンク：(クシボイに対して) 彼らが言うんだが、お前は起きた後にタバコを吸ったって— (短い間)

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Zapálil si, já ho viděl-

第一囚人：(キンクに向かって) 彼はタバコを吸った、俺は彼を見た—

KING (k Druhému vězni) Je to pravda?

キンク：(第二囚人に向かって) それは本当か？

DRUHÝ VĚZEŇ Jasně -

第二囚人：明らかに—

KING (ke Xibojovi) Ty nevíš, kdy je nástup na snídaní?

キンク：(クシボイに向かって) いつ朝食のために入場するか、お前は知っている。

(Krátká pauza) (短い間)

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Dobře ví, že deset minut po budičku-

第一囚人：(キンクに向かって) 起床後10分であることを彼はよく知っている。

KING (k Druhému vězni) Ví to?

キング：(第二囚人に向かって) 彼はそれを知っているか？

DRUHÝ VĚZEŇ Jasně že ví! Všem nověm to říkají-

第二囚人：明らかに彼は知っている！彼らは新入り全員にそれを言う。

KING (ke Xibojovi) Tak poslechni, kamaráde! Mezi budíčkem a snídaní máme deset minut. V tý době se musíme všichni volíknout<sup>14</sup>, kdo chce, se může umejt nebo i vychcat, v tom nikomu nebráníme, na to má každé právo, a kdo chce, může začít i slát, abysme se vystřídali a jeden druhému se pak neplet pod nohama. Taky hned votvíráme vokna, aby se ty noční prdy přes snídani vyvětraly. Takovej je tady zvyk, tak je to tady prostě zavedený, tak se to tady vodjakživa dělá. No a pak si každé připraví ešus, čepici a čeká na nástup. A když zařvou nástup, musíme všichni vypadnout vokamžitě z cely a postavit se venku do řady. Když hned nenastoupíme, zaženou nás zpátky a čekáme na nově nástup. Takže nepřichází v úvahu, aby se tady někdo motal, zdržoval, nebyl hotovej, hledal ešus, neměl čepici, típal žváro nebo tak - a aby to pak všichni vodsrali za něj. To je snad jasný. Kvůli jednomu se nebudeme přece všichni vracet a znova čekat na nástup. To dá rozum. A kdo to nechce pochopit, ten to brzo pochopí!

キング：(クシボイに向かって) では聞け、友よ！起床と朝食の間に我々

<sup>14</sup> ここを起点に KING の台詞に七箇所、PRVNÍ VĚZEŇ の台詞に一箇所、合計八箇所には不要なアルファベット v (文頭ゆえに大文字の場合もある) が挿入されている。特に意味は無い、あるいは訛の一種と見なすこともできるが、ハヴェル収監中に獄中から妻オルガに出された書簡集『オルガへの手紙 *Dopisy Olze*』におけるハヴェルの署名 V との相関関係を疑うに多少なりとも蓋然性があることは否定しがたい。当初、未決拘置所からの手紙には、ハヴェルは自分の名前 Václav の頭文字を用いて V または Vašek という自己の愛称を署名することが多かった (Havel, *Spisy* 5 11-81)。しかし、判決が確定し、刑務所に移されてからは、V の署名は見られなくなり Vašek のみとなる。

v の形をつぶさに観察すれば谷あるいは底辺をイメージしやすい。そのような状態を示すならば、この短い戯曲には v が八箇所、それも殆どが獄内の支配者である KING の台詞より発せられている。一方、ハヴェルが未決拘置所において署名として V にピリオドを打つ V を執拗に繰り返し用いたのは偶然であろうか。手紙には検閲があり、かなり配慮して書かれているとはいえ、名前は余りにも既知であるがゆえに、検閲対象として意味が薄い。ハヴェル自身が拘置所において感知した様々な v を終わらせようとする意思がこめられていたのだろうか。

は10分ある。その間に我々は全ての準備をしなくてはならない。望む者は洗濯もできるし、小便もできるし、そのことに対してそれぞれ権利を持っていることを、そこで我々は誰かに禁じることはない。そして望む者は、場所を変えることができるように、すなわち一人がもう一人に足下に組み込まれることがないように、ベッド・メイキングさえ始めることができる<sup>15</sup>。また、夜の屁を朝食中に換気できるように、すぐに我々は窓を開ける。ここでは、このような習慣になっており、そのように、ここでは単に決められており、ここでは、それは水が生きているように行なわれる。確かに、その後、めいめいが飯盒、帽子を準備し、入場を待つ。そして彼らが入場を叫ぶとき、我々全員は即座に個室から出て、外で順に立たなければならない。我々が直ぐに現れないとき、彼らは我々を後ろに戻して、我々は新しい入場を待つ。それゆえ問題外である。ここでは誰もヘマをしたり、時間を浪費したり、準備が出来ていなかったり、飯盒を探したり、帽子を持っていなかったり、火傷をピイピイぼやいたりする等のことがないために、そして我々全員は自分の順番の時に小便するために。これは多分、明らかだろう。我々は、一人のために結局、我々全員が戻って、再び入場を待たないようにしよう。それが合理的だ。そして理解したくない者は、それを直ぐに理解するのだ!

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Všichni to chápou a každéj to tak dělá-

第一囚人：(キングに向かって) 全員がそれを理解し、各自がそのように行なう—

DRUHÝ VĚZEŇ (ke Xibojovi) A jestli si nějaká piča myslí, že se na to může vysrat, tak to udělá nejvejš jednou!

第二囚人：(クシボイに向かって) そして、もし女みたいな奴がいて、これをダメにすることができると思えるなら、やっても最大一回限りだ。

KING (ke Xibojovi) Mezi budíčkem a snídaní je teda práce dost. Rozhodně teda není čas na nějaký pičoviny. A tím míň na nějaký vykuřování. To tady nemáme ve zvyku. Po snídaní, to je něco jinýho, pak si každéj může zapálit, jestli má co, pak je na to času dost a žádnymu to nevadí. Ale před snídaní tady nekouříme. Tak

<sup>15</sup> 囚人間の力関係を意識させる。英訳では訳出されていない。

to bylo na týhle cele vždycky a tak to tady taky bude. Těch dvacet minut, než se vrátíme ze snídaň, to každej může vydržet. To nemůže bejt pro nikoho problém. (K Druhému vězni) Mám pravdu?

キング：(クシボイに向かって) 起床と朝食の間には従って、多くの仕事がある。従って、実際に、何かくだらないことに割く時間は無い。よって、何か燻蒸消毒のようなものにあてる時間なんて更に無い。それは、ここで我々の習慣に無い。朝食後、それは少々異なる。その時には、もしそのために十分な時間があるなら、それぞれが煙草に火をつけることができ、それは誰の問題にもならない。しかし朝食前には、ここでは我々は煙草を吸わない。そのように、この監房においては常にそうであったし、そのように、これから、ここでもそうであるだろう。我々が朝食から戻る前に、その二十分をそれぞれが我慢することが出来る。それは誰にとっても悩みでありえない。(第二囚人に向かって) 俺は正しいよな？

DRUHÝ VĚZEŇ Jasně -

第二囚人：明らかに—

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Všichni to vydržíme-

第一囚人：(キングに向かって) 我々全員がそれを我慢する—

KING (ke Xibojovi) Zkrátka a dobře před snídaní se tady nekouří.

キング (クシボイに向かって) 全般的に見て、ここでは朝食前に煙草を吸わない。

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Tím spíš, že se tu tou dobou větrá-

第一囚人：(キングに向かって) その時間のお蔭でそれを換気して、それによってお前は寝ている。

KING (ke Xibojovi) To taky. Hlavně jsou tady ale lidi, co tohle vypalování hned po budíčku prostě nesnášej. Nemají to rádi, nelíbí se jim to, nedělá jim to dobře na plíce, prostě si to nepřejou. Na to mají plný právo. Je ti to jasný?

キング：(クシボイに対して) それもある。しかし、ここには主に起床警報後すぐのこの燃焼に単に耐えない人々もいる。彼らはそれを好きではないし、それは彼らに気に入らないし、それは彼らの肺に良い働きをせず、

彼らは単にそれを望まない。それに関して彼らは完全な権利を持っている。  
お前にとって、これは明らかだよな？

(Xiboj mlčí, jen rozpačitě krčí rameny)

(クシボイは黙り、ただ困ったように肩をすくめる)

DRUHÝ VĚZENĚ (zařve na Xiboje) Slyšels, co ti říkal?

第二囚人：(クシボイに向かって叫び声をあげる) 彼がお前に行ったこと  
をお前は聞いたのか？

(Xiboj mlčí, jen rozpačitě krčí rameny)

(クシボイは黙り、ただ困ったように肩をすくめる)

U koho tady po budičku uvidíme žváro, tomu ho vyrazíme z huby!

誰の所でも、ここで起床後に我々が燃焼を見たら、燃焼に彼を口から押し  
付けるぞ。

KING (ke Xibojovi) Co si dělaj na jinejch celách, to je jejich věc. Tady se prostě  
po budičku nekouří. To platí pro každého a především pro ty nový. To jsem ti teda,  
kamaráde, chtěl říct. A neřek jsem ti to jen za sebe, ale za všechny. (K Druhému  
vězni) Je to tak?

キング：(クシボイに向かって) 他の部屋どもでは何をしているか、それ  
は彼らの事だ。ここでは単に起床後、人は煙草を吸わない。これは一人一  
人に適用され、結局、新入りたちに適用される。従って、お前に友よ、俺  
はこれが言いたかった。そして、これは自分自身のためにだけ言ったので  
はなく、全ての人のためにお前に言ったのだ。(第二囚人に向かって) そ  
うだよな？

DRUHÝ VĚZENĚ Jasně -

第二囚人：明らかに—

PRVNÍ VĚZENĚ (ke Kingovi) To si myslí všichni-

第一囚人：(キングに向かって) 全ての人はそれを考える—

KING (ke Xibojovi) Všichni si tý tvý ranní cigarety všimli a všichni o tom pak

mluvili. Bylo kolem toho tady dost řečí. Já ale řek: je nověj, ještě to nezná. Takže ty řeči přestaly. Pro dnešek ti to teda prošlo. Ale propříště si pamatuj, že se ještě nestalo, aby nám tu nějaká holubárna zaváděla nový móresy. Na to tady fakt nejsme zvědavý –

キンク：(クシボイに向かって) 皆がそのお前の朝の煙草に気づいて、皆がそれについて、その後で話した。ここでは、そのまわりには言葉がたくさん聞かれた。しかし俺は言った「あいつは新入りだ、まだそれを知らない。」それで、それらの言葉は止んだ。今日という日を得るため、従って、それはお前を通り過ぎた。しかし、今後のために覚えておけ、何か鳩小屋<sup>16</sup>が新しいマナーをここに俺たちに導入するなんてことは、未だかつて起きたことはなかったということ。ここでは、それについて真相には、俺たちは興味がない。

PRVNÍ VĚZENĚ (ke Kingovi) Co jsem tady, nikdo se tu ještě nevodvážil kouřit před snídaní -

第一囚人：(キンクに対して) 俺がここにいる間、誰もここで朝食前に敢えて煙草を吸うなんて奴は未だいなかった。

KING (ke Xibojovi) Toho dnešního vajgla ti teda vodpouštíme. Ale bylo to naposled. Je ti to jasný? (Xiboj pokrčí rozpačitě rameny)

キンク：(クシボイに対して) その今日の煙草の燃えさしに関して、従って、俺たちはお前を救す。しかし、これを最後にした。分かったか、お前？(クシボイは困惑して肩をすくめる)

DRUHÝ VĚZEN (zařve na Xiboje) Co vejráš, píco! King se tě na něco ptá!

第二囚人：(クシボイに向かって叫ぶ) お前は何を見てんだよ、この女<sup>め</sup>郎<sup>ら</sup>！キンクがお前に何か尋ねてるんだ！

(Pauza) (間)

KING (ke Xibojovi) Jak vidíš, nic z toho zatím neděláme. Ted' to ale už víš a zařid' se laskavě podle toho!

<sup>16</sup> 自分たちが居る刑務所のことを戯画化して言っている。さしずめ「豚箱」という和訳が相応しいのだが、今回はチェコ語を直訳するにとどめた。

キンク：(クシボーイに対して) そこからは俺たちは何もしていないということをお前は どう見ているんだ。今、しかし、お前はそれをもう知っている、そして、それによって、まあ気さくに落ち着け。

(Delší pauza) (より長い間)

Jo, a když jsme u toho, tak ještě něco. Od zejřka budeš mít postel ustlanou tak jako všichni. Když to zvládneš jiný, zvládneš to taky. Nikdo tady nemá zájem na tom, abysme kvůli něčímú buzerantskýmú doskočiřti ztráceli kařdeř den bod. Na to pak dopláci celá cimra. A my nebudeme sjíždět rajóny jen proto, že si něřaká nová myř neumí ustlat. Když to nepochopiř a nebudeš to mít zejřta jako všichni druhý, tak se budeš celej večer učit stlát –

そうだ、俺たちがそのそばにいるときは、別の何かだ。明日からお前は皆のようにベッドを用意するんだぞ。彼らが違う風にベッド・メイキングをしたら、お前も同じようにベッド・メイキングするんだ。何かホモの着陸帯のために、毎日、俺たちが失点することがないために、ここでは誰もそれについて興味が無い。それについては後で部屋全体が清算する。そして俺たちは何か新入りのハツカネズミが自分のためにベッドを作れないという理由だけで雑用を下りるつもりはない。お前がそれを理解しないで、明日、みんな第二囚人と同じようにベッド・メイキングしないときは、夕方一杯かけて布団の敷き方を学ぶことになるだろう。

DRUHÝ VĚZENĚ (ke Xibojovi) Rozházíme ti to třeba desetkrát-

第二囚人：(クシボーイに向かって) 俺たちはお前に対して [ベッド・メイキングを覚えさせるために<sup>17</sup>] 散らかす必要が十回はある。

KING (ke Xibojovi) Deká musí bejt na všech stranách dva cenřáky vod kraje posteľe, límece prostěradla na dýlku stravenky a tak dál. Voni ti to už kluci ukážou-  
キンク：(クシボーイに対して) 毛布は全ての面においてベッドの境界から2インチで、ベッドシーツの襟は昼食券の長さでなければならぬ等々。  
あいつらは、少年たちは、もう既にお前にそれを見せる――

<sup>17</sup> [...] 部分は原典に無いが、意味が伝わるように加えた。

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Já si ho vezmu na starost-

第一四人：(キンクに対して) 俺は彼の世話を引き受けているー

KING (ke Xibojovi) Rozuměls?

キンク：(クシボイに向かって) 理解したか？

(Pauza) (間)

Každěj si na tyhle věci zvyk, a tak si na ně zvykneš i ty! Jasný?

誰もがそれらの事に慣れる，だからお前もそれらに慣れる！そうだよな？

(Pauza) (間)

DRUHÝ VĚZEŇ (ke Xibojovi) Tak se do prdele, píčo, vyžvejkní, když se tě King na něco ptá!

第二四人：(クシボイに) くそつたれ，<sup>めろ</sup>女郎よ，キンクがオメエに何かを尋ねる時は，同じようにお前も自分の心を話せ！

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Nějakej hustej, ne?

第一四人：(キンクへ向かって) 何か重苦しい，ってわけじゃないよね？

KING (ke Xibojovi) Utřel jsi ráno umejvadlo?

キンク：(クシボイに) お前は朝，洗面所を拭いたのか？

(Pauza) (間)

Máš tenhle tejden úklid, a tak za všechno ručíš! A jestli si myslíš, že jen tak přejedeš smetákem po zemi a bude to v richtigu, tak jsi na velkém omylu. Pod posteleva se vytírá, hlavně v těch rozích dole u zdi - tam si svítěj bengové baterkou, prach se utírá všude, umejvadlo musí bejt umytý, utřený, vyleštěný - a to samý hajzl. Dnes to byla hrůza, máš kliku, že tu přes den nebyl žádněj bengo. Jinak bys měl po píči. Ale večír před prohlídkou si to osobně zkontroluju. Je nás tu hafo, všichni jsme si rovný a žádněj nebude mít nějaký výjimky. A nejmíň nějaká holubárna, který ještě hoří zahozenej vajgl před bránou!

お前は今週，掃除当番だから，全てが終わった後，お前が保証するんだ！お前が，ただ表面だけをブラシに乗るようにして行き来して掃除した気に



なって、それが正しいだろうと信じているのなら、大きな間違いの中にいるのだ。ベッドの下を拭く、主に壁のところの、その隅の下一そこは懐中電灯によって光っており、埃がどこでも拭かれるし、洗面所は綺麗で拭かれていてツヤツヤしているべきなんだよ—それは庶民だって同じさ。今日は怖い事があった、お前がドアノブを握っていやがるんだが、ここに一日中、警察が居なかった。さもないければ、お前は女郎どもの所まで握るだろう。しかし、今夜、巡回前に個人的に確認してやる。ここは俺たちにとって充分さ。俺たち全てが平等であり、それぞれは何か例外を持つことは無いんだ。少なくとも何か鳩小屋があるじゃないか、門扉の前で捨てられた煙草が未だ燃えている奴は。

**DRUHÝ VĚZEŇ (zařve na Xiboje) Slez do pící, píčo, když s tebou mluví King!**

(Xiboj zůstane sedět na své posteli a stále se rozpačitě usmívá. Napjatá pauza. Druhý vězeň se chce vrhnout ke Xibojovi a strhnout ho dolů, ale King ho zadrží)

第二囚人：(クシボイに向かって叫ぶ) 女郎よ、キンクがお前と一緒に話す時は、この女郎のところまで降りて来い！(クシボイは自分のベッドの上に座ったままで、未だ当惑して微笑んでいる。緊張した間。第二囚人がクシボイに飛びかかって彼を下に引きずりおろそうとするが、キンクは彼を止める)

**KING (k Druhému vězni) Počkej!**

キンク：(第二囚人に向かって) 待て！

(Pauza. Ke Xibojovi) Tak hele, hochu! Jestli si myslíš, že si tady budeš hned první den dělat, co chceš, nebo si dokonce hrát na nějakýho kinga, tak se na týhle cimře nečapeš! Takže si to pořádně rozmysli! Na takový jako ty tady ještě máme, to by ti mohlo bejt jasný!

(間。クシボイに向かって) では、ちょっと坊や！もしお前がここで初日すぐに、お前が望むことをするか、結局は何かキンクと争おうと腹づもりしているなら、お前はこの部屋の中で誰もつかまえない。それゆえ男たちは心を正しく入れ替えた。ここにお前のような奴が未だいる、それはお前に明らかであろうに。

(Pauza) (間)

PRVNÍ VĚZEŇ (ke Kingovi) Ten je ale vofouklej!

第一囚人：(キンクに) しかし、何と言う奴だ！

KING (ke Xibojovi) A padej z tý betle dolů!

キンク：(クシボイに) 下に降りて来い！

(Pauza, Xiboj se nehýbe)

(間, クシボイは動かない)

DRUHÝ VĚZEŇ (zařve na Xiboje) Neslyšels?

第二囚人：(クシボイに叫ぶ) 聞こえなかったのか？

(Pauza, Xiboj se nehýbe)

(間, クシボイは動かない)

KING (ke Xibojovi) Tak hele, chlapečku, nemám rád, když tady ze mě někdo dělá vola! Jenomže mě jen tak nevytočíš!

キンク：(クシボイに向かって) そらなあ、坊やよ、ここで誰かが俺から雄牛を呼ぶのが、好きじゃないんだよ。

PRVNÍ VĚZEN (ke Xibojovi) Okamžitě seskoc dolů a omluv se Kingovi!

第一囚人：(クシボイに) 直ぐに下に降りて、キンクに謝れ！

(Pauza, Xiboj se nehýbe a jen se rozpačitě usmívá)

(間, クシボイは動かず、ただ困惑して微笑む)

DRUHÝ VĚZEŇ (zařve na Xiboje) Ty kuřbuřte jeden zasranej!

第二囚人：(クシボイに向かって叫ぶ) おいホモよ、くそったれ！

(Druhý vězeň přiskočí k postelím, strhne Xiboje za nohu dolů, Xiboj spadne na zem, Druhý vězeň ho kopne a vrátí se po bok Kinga. Xiboj pomalu vstává a nechápavě se rozhlíží po přítomných. Delší pauza)

(第二囚人がベッドに向かって飛びかかり、クシボイの片足を掴んで下に引きずりおろし、クシボイは床の上に落ち、第二囚人は彼にケリを入れてキンクのところに戻る。クシボイはゆっくりと起き上がり、理解できない様子でそこにいる人間たちを見回す。より長い間)

TŘETÍ VĚZENĚN (tiše) Kluci-

第三囚人：(静かに) 少年たちよー

(Pauza, všichni hledí na Xiboje)

(間, 全員がクシボイを見ている)

KING (aniž se otočí k Třetímu vězni) Co je?

キング：(第三囚人の方には顔も向けずに) 何だ？

(Pauza, všichni hledí na Xiboje)

(間, 全員がクシボイを見ている)

TŘETÍ VĚZENĚN (tiše) Vždyť to je nějakej Maďar nebo co –

第三囚人：(静かに) こいつはハンガリー野郎か何かだからではないかとー

(Všichni pohlédnou tázavě na Kinga, napjatá pauza)

(全員がキングをいぶかしげに見て, 緊張した間)

KING (po chvíli, tiše) Jeho chyba -

キング：(しばらくしてから, 静かに) 彼の間違いだー

(King vykročí zlověstně směrem ke Xibojovi. První, Druhý i Třetí vězeň ho zvolna následují, všichni obklopují Xiboje a stále těsněji se k němu přibližují.

Opona padá)

(キングはクシボイの方に不気味に進み出る。第一, 第二, 第三囚人もゆっくりと彼に従い, 全員がクシボイを囲み, 続けてよりキツク彼に乗る。幕が下りる)

Konec hry 終劇

## 引用文献

落合和昭「Tennessee WilliamsのEscape：1930年代終わりか, 1940年代初めに書かれた, 反人種主義一幕劇」『駒澤大学外国語論集』13 (2012) :37-54.  
ベケット, サミュエル『ベケット戯曲全集3』安堂信也・高橋康也共訳 (白水社,

1986) .

Ambros, Veronika. "Daniela Fischerová's New Palimpsest between "Living in Truth" and "the Battle for an Island of Trust"." *Canadian Slavonic Papers* 36.3 (1994): 363-76.

Beckett, Samuel. *Catastrophe et autres dramatiques*. Paris : Editions de Minuit, 1982.

---. *Three Plays*. New York: Grove Press, 1984.

Bigler, Robert M. "From Communism to Democracy: Hungary's Transition Thirty-Five Years After the Revolution." *East European Quarterly* 25.4 (1991) : 437-62.

Camus, Albert. *L'homme révolté*. Paris: Gallimard, 1951.

Carey, Phyllis. "Face to Face: Samuel Beckett and Václav Havel." *Christianity and Literature (C&L)* 44.1 (1994) : 43-57.

---. "Living in less: Vaclav Havel's drama". *Cross Currents* 42.2 (1992) : 200-12.

Czerwinski, E. J. "Jesters and Executioners: The Future of East European Theater and Drama." *Comparative Drama* 5.3 (1971) : 207-26.

Elam, Keir. "Catastrophic Mistakes: Beckett, Havel, the End". *Samuel Beckett Today/ Aujourd'hui: An Annual Bilingual Review/Revue Annuelle Bilingue (SBT)* (1994) : 1-28.

Fodor, Sarah J. "Wagering on Transcendence: The Search for Meaning in Literature." *Anglican Theological Review* 81.3 (1999) : 527-28.

Freimanová, Anna, ed. *václav havel o divadle*. Praha: Knihovna Václava Havla, 2012.

Havel, Václav. *Der Fehler*. Trans. Joachim Bruss. Reinbek bei Hamburg : Rowohlt, 1983.

---. *Fout*. Trans. Sjoerd de Jong. Hague: STINEDRA, 1983.

---. *Hôtel des Cimes : suivi de Tant pis*. Trans. Marie Aymonin, Marcel Aymonin and Erika Abrams. Paris: Gallimard, 1993.

---. "Mistake". Trans. George Theiner. *Index on Censorship*. 13 (1984) : 13-14.

---. *Spisy2. Hry*. Praha: Torst, 1999.

---. *Spisy4. Eseje a jiné texty z let 1970-1989*. Praha: Torst, 1999.

---. *Spisy5. Dopisy Olze*. Praha: Torst, 1999.

Havel, Václav, and František Janouch. *Korespondence 1978-2001*. Praha: Akropolis, 2007.

Keane, John. *Vaclav Havel: A Political Tragedy In Six Acts*. New York: Basic Books, 2000.

Quinn, Michael L. "Havel's "Redevelopment": Architecture, Government and the Orange

Tree Theatre." *Theatre History Studies* 13 (1993) : 63-78.

Rocamora, Carol. *Acts of courage: Václav Havel's Life in the Theatre*. Hanover: Smith and Kraus, 2005.

Straughn, Jeremy Brooke. "'Taking the State at its Word': The Arts of Consentful Contention in the German Democratic Republic." *The American Journal of Sociology* 110.6 (2005) : 1598-0\_7.

Welz, Claudia. "Scenes of Shame, Social Roles, and the Play with Masks." *Continental Philosophy Review* 47.1 (2014) : 107-21.

Williams, Tennessee. *Mister Paradise and Other One-Act Plays*. New York: New Directions, 2005.

Žižek, Slavoj. "Attempts to Escape the Logic of Capitalism." *London Review of Books* 21.21 (1999) : 3-6.

"Excerpts from Recent Reviews of Biographies, Autobiographies, and Other Works of Interest." *Biography* 23.2 (2000) : 418-72.